HK デザインアワード NEWS

7th-vol.3

この HK デザインアワード NEWS は、本アワードの審査会などについてレポートするものです
発行:HK デザインアワード事務局

二次審査（現地審査）
2025 年 11 月 3 日(火)～25 日(火)
会場：
現地審査（訪問順）
11/3　新札幌アクティブリンク（札幌市）
11/13　奥尻町総合庁舎（奥尻町）
11/17　れんがの家（鹿追町）
11/25　狸上るビル（札幌市）
地と橋（札幌市）
市隠（札幌市）
最終選考　日鉄鋼板株式会社 北海道支店
参加者：
審査委員長
松島潤平
［北海道大学大学院工学研究院准教授］
審査委員
大塚正樹
［日鉄鋼板株式会社北海道製造所所長］
小西彦仁
［(公社) 日本建築家協会（JIA）副会長兼北海道支部長］
川島隆司
［北海道板金工業組合理事長］
佐藤圭
［三木佐藤アーキ］
酒井秀治
［北海道教育大学岩見沢校准教授］
事務局
弘田亨一
［実行委員長／（公社）日本建築家協会（JIA）北海道支部］
小倉寛征
［(公社) 日本建築家協会（JIA）北海道支部］
佐藤正人・原口佳己・高橋敏幸・袴田清貴
［日鉄鋼板株式会社北海道支店］
記録
登尾未佳

現地審査を経て、各賞が決定！

7th HK DESIGN AWARD

2025 年 11 月 3 日～25 日にかけて、
第 7 回 HK デザインアワードの二次審査が行われました。
現地審査の対象は 6 作品。
今回も北海道各地を巡りながらの審査会となりました。
その様子と結果をお知らせするとともに、
審査委員長による総評と各審査委員からの選評（講評）を掲載いたします。

●決戦投票の結果、最優秀賞および優秀賞が決まる

現地審査となる二次審査は 4 日間におよびました。1 日目に札幌市内で 1 作品、2 日目には奥尻町へ渡って 1 作品、3 日目は鹿追町で 1 作品、4 日目には再び札幌市内で 3 作品を訪問。最終日の現地審査後には、場所を移して賞を決定する最終選考会が開かれました。選考会では、はじめに審査委員一人ひとりから作品毎のコメントが述べられました。それぞれの立場からの率直な感想をはじめ、今回の幅広いテーマ性（『～～とともにある鉄』）から、論点は鉄の使われ方やそれに伴う意匠性、空間性、構造、施工技術、周辺環境との関係、社会性まで展開。時に辛口で忌憚のない意見も聞かれ、さらに審査基準を超えた建築としての評価にもおよびました。その後、投票に移り、審査委員一人が 3 票を持って投じた結果、2 作品が全員の票を獲得。議論では甲乙つけ難く、決戦投票に進むこととなり、最優秀賞が決定しました。次に、優秀賞についての審議が行われ、決選投票の次点 1 作品とすることで意見がまとまりました。続いてその他の作品についても厳正な審議の上、4 作品が入賞となりました。
詳しくは下記の通りです。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

二次審査結果

- **最優秀賞**（1 作品）
  作品名　狸上るビル
  設計者　千葉 拓也、高嶋 一穂
- **優秀賞**（1 作品）
  作品名　新札幌アクティブリンク
  設計者　出口 亮、渡邉 竜一、池邉 慎一郎
- **入賞**（4 作品）
  作品名　市隠
  設計者　中山 眞琴
  作品名　れんがの家
  設計者　山本 郁江、住谷 素子、垣田 淳
  作品名　奥尻町総合庁舎
  設計者　菊池 規雄、高橋 幸宏、山脇 克彦
  作品名　地と橋
  設計者　宮城島 崇人

●審査委員長からの審査総評

審査委員長　松島 潤平

今回で 7 回目となる本アワードでは、『～～とともにある鉄』というテーマを掲げ、鉄と他要素の協同関係に着目することで、様々な事象と伴走・伴奏する鉄のインクルーシヴな力について考察を深める契機とさせていただきました。ご応募いただいた 23 作品は、手法、解釈、思想、様々な観点においてテーマへのユニークな回答がみられる力作揃いで、素晴らしい知見を与えてくれるものばかりでした。主催者と審査委員を代表して、応募者の皆様と応募をご承諾いただいた建主の皆様へ深く感謝申し上げます。

現地審査で訪れた入賞作品は、いずれも鉄や金属がその建築の名バイプレイヤーとして美しい姿を見せてくれるものでしたが、同時に、単体の建築の枠組みを超えて展開していくような大きな可能性も感じさせてくれました。特に『狸上るビル』は、バイプレイヤーとしての鉄たちがまるでヒーローチームのように建物のあちこちに集結しており、これまでの建築知の集大成のような圧倒的な説得力と、高いエンターテイメント性を見せてくれました。そのサスティナブルなアイデアの躍動感は、アーケードを伝って全国に伝搬するような感覚をも覚えました。

対照的に『アクティブリンク』は、計画、構造、環境、設備、法規解釈、維持管理、まちづくりにまで至る多種多様な課題解決が「鉄製の楕円のリング」という明快な図式ひとつに結実された、超主役級の鉄のドンのような圧巻の存在感を放っていました。また、極限まで部材数を減らしたその抽象的な姿は、これからの新さっぽろのコンテクストが刻まれていくためのキャンバスのようでもあり、まち全体のバイプレイヤーとして未来を創っていく可能性を感じました。

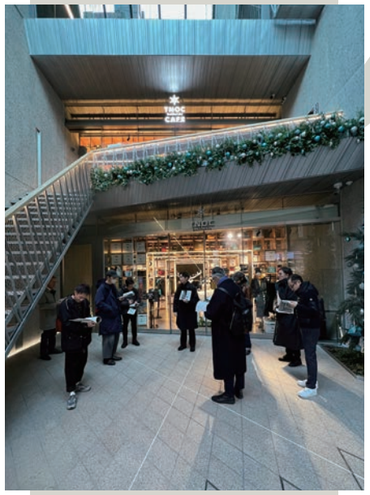
2 次審査で最優秀賞を争ったこの 2 作品については、「これまでの鉄の集合知」と「これからの鉄の可能性」の間で揺れる決し難い議論が展開されましたが、今回においては、より多彩なアイデアの応用力を持ち、新築・改修問わずすぐに参照できる汎用性を持つ『狸上るビル』を最優秀賞に、『アクティブリンク』を優秀賞に選出しました。改めて、本アワードでここまでの高次な作品がぶつかったことに感激しています。

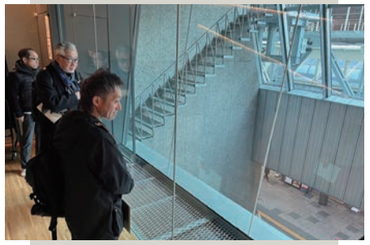
また、『市隠』、『れんがの家』、『奥尻町総合庁舎』、『地と橋』についても、鉄や金属の創造性溢れる用い方に留まらない、周辺環境との独自の関係性の構築に目を見張りました。それは前回テーマである「これからの原風景」への回答そのものとも言えます。募集時のリード文にもあったとおり、今回のテーマは前回審査時の素朴な気付きから生まれたものですが、両テーマは表裏一体の回帰関係にあったことを再認識させられました。本アワードの前回と今回を総合して、鉄、そして金属が持つ文化の媒体としての力を、社会へしっかりと明示することができたのではないかと思います。

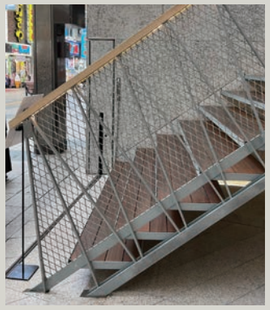
こうなると次回のテーマに悩んでしまうわけですが、これはとっておきの嬉しい悩みとして、思索と議論を続けていきたいと思います。また次の機会で新たな建築の金属表現に出会えることを、心より楽しみにしています。

最優秀賞・優秀賞選評

ここからは、最優秀賞（1 作品）、優秀賞（1 作品）、入賞（4 作品）の 6 作品について、受賞作ごとに各審査員による選評をお伝えします。併せて、現地審査の様子を伝える写真を紹介します。







《 審査委員による選評　最優秀賞（1 作品）》

狸上るビル

千葉 拓也・高嶋 一穂

— 審査委員長　松島 潤平 —

鉄骨ラチス梁、フェローデッキ、階段手摺、異形鉄筋サイン、…。厳しい施工上の制約を乗り越えてきた、鉄のアベンジャーズが 1 つの建築に集結している。ここからアーケード街全体、ひいては世界中にも躍動が伝っていくような変幻自在･八面六臂の鉄の活躍ぶりに、「ものづくりの喜びとともにある鉄」という、今回のテーマに対すると真ん中の回答を見せていただいた。

— 審査委員　大塚 正樹 —

この建物は自然光のポケットパークから引き込まれ、各階で優れたデザイン性と居心地のよさを感じます。一方、びっくりするような制約の中で成立し　施工の困難さ、コストや環境対応等も高次元で両立・達成されています。「制約は創造の母」(ストラビンスキー) という言葉を思い出しました。工学的に鮮やかな手腕と高度なデザイン性の両立に感服しました。

— 審査委員　小西 彦仁 —

ビル全体が素材素地で仕上げられており、スラブのデッキプレート、その下の仮設を兼ねたラチス梁、そして亜鉛メッキの手摺など、デザインの要となる箇所に鉄製品が使用されている。狸小路から少し引きを取りポケット空間をつくることで通りにメリハリをつくるなど空間構成の巧みさと相まって金属が効果的に主張していることを評価した。

— 審査委員　川島 隆司 —

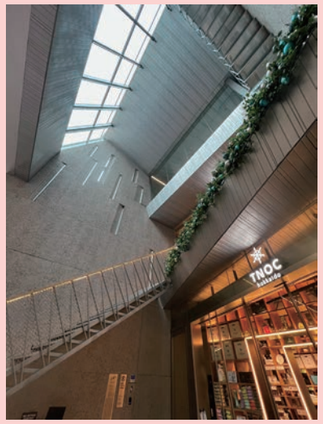
建物をセットバックすることで自然光を取り入れ、明るく広く作られたエントランス空間は、引き込まれる雰囲気があり、古くからある狸小路商店街の他とは違う新しい形を見せてもらいました。また、本来仕上げ材で覆われるラチス梁・フェローデッキといった鉄をふんだんに仕上げ材として現し、それが明るく開放的な空間と合い、今回のテーマにふさわしい作品だと思います。

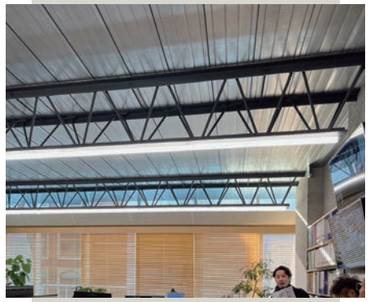
— 審査委員　佐藤 圭 —

狭小地の施工的制約を逆手に取った、仮設と仕上げを兼ねる合理的かつ発明的な構法の中で、鉄が重要な役割を果たしていました。考え抜かれたディテールの集積が、建築に狂気的とも言える密度をもたらしており、心を動かされました。ビル単体の魅力もさることながら、アーケードに対してセットバックし、光やアクティビティを引き込もうとする形式は、都市への展開可能性を備えており、その点にも惹かれました。

— 審査委員　酒井 秀治 —

最優秀賞の受賞おめでとうございます。合理的で洗練された形態や工業製品の無骨さを活かした素材感の中にも、手仕事の人間味のある建築だと感じました。それも現場の施工者の方との妥協のない執念ともいえるような交渉・マネジメントの賜物です。そして、この建築プロジェクトには、小さなスケールから都市をデザインするインサイドアウトの思想を体現していることに別の価値があると思います。未来のアーケード商店街をまちに開かれた人の居場所、にぎわい創出の場として再生する規範を内包していることが素晴らしいと思います。





《 審査委員による選評　優秀賞（1 作品）》

新札幌アクティブリンク

出口 亮・渡邊 竜一・池邊 慎一郎

— 審査委員長　松島 潤平 —

鉄のアワードに出現するべくして現れた、ラスボスのような存在感。しかし新さっぽろに浮かぶこの鉄のモンスターの正体は、人間社会の様々な分断を滑らかにつなぎ直す、強く優しい勇者であった。施工プロセスに注視せざるを得ない建築ながら、設計者たちは常に未来の話をしていた。全応募作品中、最も射程の長い先の時間を見せてくれた「これからの社会とともにある鉄」を体現する快作である。

— 審査委員　大塚 正樹 —

一体構造かつ全溶接で構成された楕円の空間は、地域のシンボルとして・リハビリの場として･コミュニティの活動の場として活用され、トータルでの優れたデザイン性を感じます。メンテナンスへの深い配慮、設計＆施工の一体化、気候への対応など、ものづくりのあり

優秀賞（つづき）・入賞選評

方としても大変興味深く感じます。この白い鉄のリングの美しさと技術力に感動しました。

— 審査委員　小西 彦仁 —
再開発で建つ各ビルを道路上空でつないでいる歩道橋的な歩廊である。構造体は厚い鋼鈑でくられており、造船技術の賜物である。柱や梁はもちろん屋根も鋼板のままである。それは単一素材が全てを構成することによるディテールレスのような状態を生み出しているが、その裏には確かな検証と効果を考え抜いての結果と言える。用途上の使用制限があるのは残念であるが、新しい風景となっていることには事実である。

— 審査委員　川島 隆司 —
この作品は、楕円形という形状と壁面はガラスという美しいフォルムで、単なる上空通路ではなく、直結する病院のリハビリや地域住民の活動に使われていることから、街のシンボルとなっている。また、複雑な形状・寸法の鉄の部材を緻密な計算と匠の技の融合で組み立てた見事な作品です。

— 審査委員　佐藤 圭 —
都市開発のシンボルとして、複雑に絡み合った与件に合理的に応答しながら、シンプルで美しい形へと結実させている点に感銘を受けました。都市的、施工的な論理で構築されていながらも、高さが抑えられた断面構成や反復する架構によって、人間的なスケールの空間体験を生み出している点が興味深く感じられました。

— 審査委員　酒井 秀治 —
「越境」する姿勢が徹底されたプロジェクトだと感じました。敷地境界と道路区域を越えて建築をつなぐための制度枠の解釈、デジタル演算による形態デザインと土木造船技術の融合、メンテナンスやイベント活用を見越したサインナンバリングによる設計・施工から維持管理・運用までの一体性、そして設計者・職人・事業者・まちの使い手との協働。越境するところにイノベーティブで新たな建築プロジェクトがあることを思い知らされました。

《 審査委員による選評　入賞（4 作品）》

市隠
中山 眞琴

— 審査委員長　松島 潤平 —
清々しいほどに錆びへのフェティシズムと骨董趣味で覆い尽くされた建築である一方、ざらついたワイヤーメッシュの重なりに対する光や雪の絡み方等の発見的な現象を語る設計者に、「目利き」といわれる鋭敏な観察行為をひたすらに生む、環境増幅装置として建築が働いていることに気付かされた。僕自身も、しばらく工業製品として眺め続けていた鉄を、地球の地殻の約 5% を占める自然物として感じ直すことができたような気がした。今回のテーマへの回答をいま僕が用意するならば、「“目”とともにある鉄」だろうか。

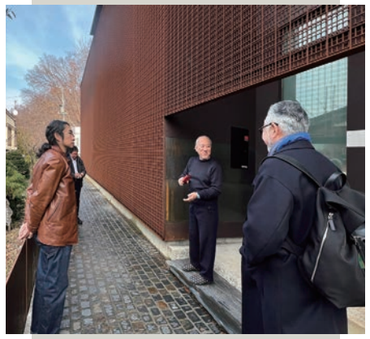
— 審査委員　大塚 正樹 —
この建物は、要所に積層した無塗装のワイヤーメッシュを使われており、外からは重厚かつ意匠性に優れ、内からは風通しとある程度の見通しの良い空間を成立させています。「錆」を建築物にデザインとして活用する発想を知り認識を新たにしました。このメッシュに雪が積もり、また溶ける時の話など、周りの自然と調和し居心地の良い上質な暮らしが想像され、わびさびに通じる感覚もあり大変刺激的でした。

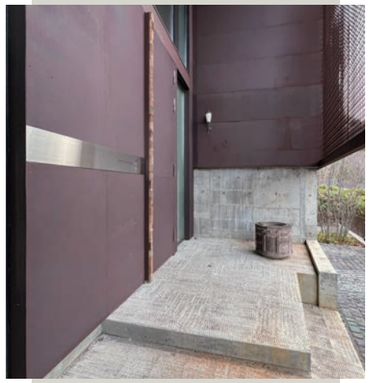
— 審査委員　小西 彦仁 —
外部仕上げのすべてを錆びの鉄で覆われた住宅である。重層するメッシュは建物に陰影をつくり透過する部分としない部分でさらに表情が変化する。冬には雪が絡みつき新たな表情が生まれるという。内部からはメッシュ越しの外がみえるが、フィルター越しの風景はより深みを増している。内部空間にも効果的に金属が用いられ作者の成熟した技がうかがえる。他を寄せ付けないデザイン力は見事である。

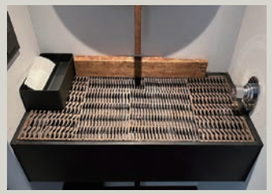
— 審査委員　川島 隆司 —
一面に張りめぐられた、錆びたワイヤーメッシュが目を引き、幾重にも重ねられたそれが丁度よい目隠しにもなって建物への興味をそそられます。冬にはこの金網に雪が付着しまた違った美しい景色が楽しめます。外壁にはコールテン鋼を施し、金網と重なって重厚感を感じられます。室内にも様々な拘りを持たれた素晴らしい作品です。

— 審査委員　佐藤 圭 —
道路に沿って立ち上がるメッシュフェンスに圧倒されますが、よく見ると細かな線材の集まりにより、透過性があることで印象は和らぎます。ワイヤーメッシュをずらして重ねることで奥行きが生まれ、見る角度によって表情が変化する点も興味深いです。室内の開口部からフェンス越しに見える風景や、そこに積もる雪の表情も美しく、閉じることと開くことの関係が巧みにコントロールされていると感じました。

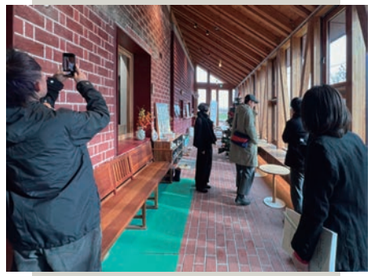
— 審査委員　酒井 秀治 —
この建築に無垢で飾らないストイックさをまとわせる外壁全面の金網（ワイヤーメッシュ）。







入賞選評（つづき）



ピッチの異なるメッシュの重なり合いを現物で吟味しながらレイヤーの表情を創り上げていったとのこと。「メッシュにも薄っすらと雪が積もる、すると景色が変わる」「メッシュを通すと雪が点滅しているようだ」設計者の方のその眼差しが建築の美しさを信じる強さだと思いました。そしてお話を聞いていて、建築には「色艶」があってこそ「侘び寂び」をまとうのだと感じました。

れんがの家

山本 郁江・住谷 素子・垣田 淳

— 審査委員長　松島 潤平 —

鉄のアワードに非ずなタイトルであるが、煉瓦色の鋼板屋根がもたらす効果は存外に大きい、と思う。と言うのも、煉瓦だけでは煉瓦でしかないが（？）、煉瓦色の鋼板があることで、訪れる人々それぞれの心象風景が生まれ得る、抽象的なひらがなの『れんがの家』になったのではないか。「なんとなく臙脂色に染まった、れんがっぽい空間」。この程度にみんなの記憶が綺麗に収斂されない世界を、僕は望む。

— 審査委員　大塚 正樹 —

親しまれてきた「レンガの家」のレンガを生け捕りにして福祉＆コミュニティの起点となる建物を細心の配慮で色、角度、風景との調和、気候対応、強度等バランスさせて再構築されています。デイサービスにみえた方やご家族、近隣の皆様方の笑顔の写真が印象的で、周囲の自然の風景とともに居心地の良い空間でした。今後とも皆様で楽しい時間を共有される様子が目に浮かびます。（江別産のレンガ＆塗装鋼板がマッチしていました）

— 審査委員　小西 彦仁 —

数十年、十勝平野の風雪に耐えたレンガ造りの家は地域のシンボル的存在でもあった。以前の持ち主からレンガの外壁を残すことで譲り受けコンバージョンされた。構造補強及び増築がなされたが、レンガは依然より強く主張されたような気がする。赤い金属の屋根と風景に馴染みさらに数十年いや百年と地域のシンボルであり続けてほしいと願う。

— 審査委員　川島 隆司 —

第一次産業の盛んなこの地方は、古くから大きな屋根に板金を施した建物が多く、この作品も築 60 年のレンガ造の農家をリノベーションしたもので、地域の人々から愛着のあった建物なので、外観は極力そのままのイメージを残す工夫がされている。建物に近づくにつれて大きな赤い屋根が目に飛び込み直ぐにそれと分かり、既存のレンガの壁を残すことで見事にかつての建物のイメージを残していると思います。

— 審査委員　佐藤 圭 —

主役はれんがですが、破風や軒天まで板金を巻き込んだ大屋根の板金やサッシ周りのスチールなど要所に用いられた金属をはじめとしたさまざまな素材の関係性が丁寧に構築されていました。形式が過度に自己主張することなく、使い手の目線に立って考えられたディテールに共感しました。

— 審査委員　酒井 秀治 —

設計者の方から「記憶資源」「日常資源」「素材資源」、３つの地域資源を循環させることを目指している話がありました。十勝の農風景に接続するように赤屋根の鉄がある、雪景色の中でも地域に暖かく灯る場所です。でもその建築は、人々の記憶や愛着を次世代に継ぐものであり、また日常生活の場として様々な活動やひとのつながりを生み出すことに価値があると思います。そしてもう一つ印象的なのは、施設の方から日々設計者の方に色々な相談事や活用報告があるということでした。地域と伴走するコミュニティアーキテクトとしての在り様が学ぶべきモデル価値だと思います。

奥尻町総合庁舎

菊池 規雄・高橋 幸宏・山脇 克彦

— 審査委員長　松島 潤平 —

塩害対策として選定された外装のアルミ板金は、河岸段丘の谷地のなかで、空模様の移ろいを慎ましく反射していた。住民とともに静かに空を見上げているような佇まいであり、万が一の非常時には希望の象徴のように優しく発光して見えるだろう。離島という条件を掻い潜りながら、金属に限らず様々な素材が顔を出すが、抑制されたカラースキームによって全体として静謐な空気を漂わせている。

— 審査委員　大塚 正樹 —

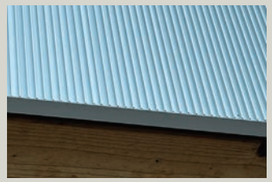
銀白色の金属屋根が山なみの稜線と重なり、内部のトドマツやカラマツの柔らかな質感が好ましく、支える構造もリズミカルに感じました。正直あまり知らなかった最新の役場・消防を興味深く拝見し、勤務されている皆様の仕事のしやすさや、町民の皆様の居心地の良さ、防災拠点としての活用の片鱗が垣間見えました。沿岸部かつ離島における適切な部材選択や対応にエンジニアとして興味深く、設計者の情熱を感じました。

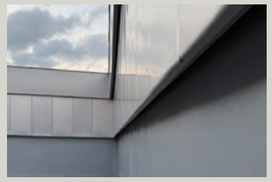
— 審査委員　小西 彦仁 —

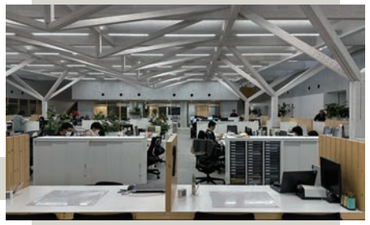
低く抑えられた建物はアルミ板の大屋根が載せられている。塩害や強い風に耐えるためであり、経年の変化も極めて遅いであろう。その屋根形状は周辺の山並みに呼応させるために変形させている。シルバーの配色も空や夕日を映しこみ表情が刻一刻と変化することを狙ってのものである。町民が集う新たな施設が金属の大屋根に覆われていることはコンペ主旨としては嬉しく、やがて風景の一部になることであろう。

— 審査委員　川島 隆司 —

島の中心部に町の主要施設を集約させた総合庁舎で、屋根・壁に施されたシルバーのアルミ板金が目に入る建物です。屋根は複雑な形状をしており、加工性の良くないアルミ材を丁寧に施工してあります。また、耐風圧強度を上げるために嵌合式の成型材を使用し表面をフラットに仕上げることで、スッキリと見せております。内部の役場の執務室も開放的で島民の方々にとって素晴らしい総合庁舎だと思います。







入賞選評（つづき）

— 審査委員　佐藤 圭 —
内外のさまざまな条件から導き出された特徴的なボリュームをアルミで仕上げたその佇まいには、単体の建築としての合理的な美しさを感じました。一方で、スチールの手すりなど、内部に点在するマテリアルの扱いには違和感も覚えます。しかし、その不均質さが、正しさを纏った建築に破れをもたらし、空間に豊かさを与えていると感じました。

— 審査委員　酒井 秀治 —
離島であること、重塩害地域であること、島の環境・制約条件から組み立てられた建築形態・素材の力強い説得力。現地で建物を見た時の背景の稜線とのバランスが印象深かったです。ヒアリング時に島民の方々のこの建物に対しての感想を聞きました。「六本木のようだ」。そうであって良いし、そうでしかないのかもしれないですが、これから自分たちの地域のものであるという愛着（誇り）が生まれていけば嬉しいです。子どもが参加したアートワークも素敵でした。多目的ホールをかねる議会堂や裏側の広場が島民にたくさん使われていくことを期待しています。

地と橋

宮城島 崇人

— 審査委員長　松島 潤平 —
T 字型の平面形状により、家に居ながらにして家を眺めることができる。眺める視座があればすべては庭になる。庭木や草花を眺めるように、窓外の外装の鋼板を眺める。外装を眺めるように、水槽にいる亀の甲羅を眺める。甲羅を眺めるように、内装の合板を眺める。連歌のようについ観察を続けてしまう豊かさのなかに、「庭とともにある鉄」という回答の真髄を感じた。

— 審査委員　大塚 正樹 —
庭の中に住居から橋が突き出たような形で　その橋の中が実に居心地の良い空間となっていました。また橋の下が風除室で全開放もできる。四季とともに庭の景色も変わり、子供たちが楽しく駆け回る様子が目に浮かぶ家でした。壁面の鋼板が寒暖差で別の表情を見せるユニークな施工も意外でした。上階からの眺望、塔にも見える外観、施主様の満足されている御様子が大変印象的でした。

— 審査委員　小西 彦仁 —
ガルバリウム素地鋼板の平板が張られたブリッジ状の長方体の空間は内部に居間が入っている。ガルバリウム鋼板は外気温により歪みが生じるが、それが陽の光の反射を変化させ季節や時刻により多様な表情を生み出しているであろう。ディテールも極めてミニマムなものとしてより純粋なボックスとなっており、その異化が古い住宅地において新たな解答を生み出している。

— 審査委員　川島 隆司 —
橋を連想させるリビング部は、天井が高く開放的で、床やソファー、窓際に腰掛けると窓の高さが丁度よく、庭や外の景色を見渡せ、くつろぐことができる。また、外壁には北海道のかつての農村でよく見られたような、歪の出た平板板金を貼り再現している。季節によってこの歪具合が変化することも楽しめる工夫のされた作品です。

— 審査委員　佐藤 圭 —
北国に多いコンパクトな建物形状では、内部から外観を意識しにくい傾向があります。本計画では、敷地の環境から導き出された T 字型の建物配置により、室内にいながら建築自身の外観が視界に取り込まれます。それにより、分節されたボリュームの異なる板金仕上げによる外観が自己完結的な表現に留まらず、庭や周辺の風景の多様な要素と関係を結んでいく在り方に共感しました。

— 審査委員　酒井 秀治 —
シワシワの鋼板の外壁は、設計者が求めた建築と環境の間の原型から来るものです。確かに柔らかくてちっぽけな被覆とも言えますし、環境の中でゆらぐものかもしれませんが、ブリッジはしっかりとそこに在ります。むしろ、建築の弱さ、環境との一体化といった普遍的な問いの中で、この強い作品性を担保していること、見方によっては仕上げらていない外装施工をオーナーとの関係の中で実現していることにすごさを感じます。敷地に浮く橋（リビング）の低めに抑えられた窓から地（庭）を望んでいると環境の中に居るような心地良さがありました。

本ニュースの準備中に悲しいお知らせがありました。優秀賞の受賞者である渡邉竜一さんの訃報です。本アワード関係者一同よりお悔やみ申し上げるとともに、以下に審査委員長による追悼文を掲載いたします。

追 悼

本アワードの優秀賞『新札幌アクティブリンク』を受賞された渡邉竜一さんが、2026 年 1 月に急逝されました。昨今の建築界、土木界に多大な影響を与え、間違いなく未来を牽引していくはずであった方を失うことはあまりにもつらく、ただ絶句するばかりです。しかし渡邉さんはナンセンスな社会の停滞を何よりも嫌い、機能不全を打開するために徹底的に行動する方でした。今こそその遺志を継ぎ、喪失を埋めるためのより大きなうねりをつくる必要があると考えます。
渡邉さんの知性と行動力に深く敬意を表するとともに、心よりお悔やみ申し上げます。（松島 潤平）

鉄や金属がより広義で魅力的に使用・表現された作品の数々に出会うことができました。改めて受賞者の皆さん、誠におめでとうございます。
本アワードの表彰式は 2026 年 5 月（JIA 北海道支部総会）を予定しております。なお、次回の開催は 2027 年の予定です（隔年開催）。また多くの皆さまから意欲的な作品のご応募があることを願っております。

HK デザインアワード
共催：日鉄鋼板株式会社北海道支店
（公社）日本建築家協会（JIA）
北海道支部
後援：北海道板金工業組合